

# 漁岳周辺森林生態系 保護地域の設定

鮫島 惇一郎

さめじま・じゅんいちろう  
1926年東京都生まれ。  
北海道大学理学部卒業。  
林業試験場北海道支場退職  
後、自然環境研究室を主宰  
する。共著『原色図譜エンレイソウ  
属植物』などの著書があ  
る。

## 地域の概況

漁岳は、恵庭市を流れる漁川の上流にあって、札幌市の南西、空沼岳の南に位置している。頂上はハイマツに覆われ、西斜面には丈余のチシマザサの密生地が広がっている。(図1-1)

漁岳周辺に森林生態系保護地域を設定する目的は、エゾマツ、トドマツの北方常緑針葉樹とミズナラ、シナノキなどの温帯性落葉広葉樹からなる多様な森林群落を、原生的な状態をもって存在させるこの地域の天然林を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究などに寄与できるとしている。またこの地域の特性として、気候区、森林帯、植物区系、林業的地帯区分なども考慮し、森林が原生的な状態にあることも理由にあげられている。

## 森林の特徴

(図1-2)

この地域は、西側の漁入沢・豊平川本流上流部、東側の漁川上流部とオコタンペ湖周辺の三つに別れている。

漁入沢、豊平川本流上流部の標高七〇〇〜九〇〇m付近は、上部針広混交林に区分される林帯でエゾマツ、ダケカンバの大径木が優占し、そのほか針葉樹ではトドマツ、広葉樹ではケヤマハンノキ、カエデ類等が混じるが全体的にはやや疎林状の林分である。その上部はダケカンバ林帯から高山帯となり、山頂周辺はハイマツ群落の発達に特徴を認めることができる。

漁川上流部標高七〇〇〜九〇〇m付近は、上部針広混交林にあたり、エゾマツとダケカンバの中

大径木が混生する針広混交林となっている。標高一、〇〇〇mから上部はダケカンバの疎林となり、ミヤマハンノキ・ナナカマド・オガラバナを下層に交え、山頂はハイマツが優占し、その周囲に樹高三〜四mのダケカンバ・ミヤマハンノキがモザイク状に小さな群落をつくる。

オコタンペ湖周辺の一部湿地をふくむ、標高六〇〇m付近は、針葉樹が優占する針広混交林で、エゾマツ、トドマツを主体とし、これにカンバ類、ミズナラ、ニレ類、イタヤ、シナなど多種の広葉樹が混交する原生林で、北海道中央部を代表する林相である。標高が増すに従い矯生化したダケカンバが優占する広葉樹林となり、稜線のハイマツ帯に至っている。

森林帯の林床植生は、おおむねチシマザサとクマイザサで、標高一、〇〇〇m付近から上部はチシマザサが密生し、特に漁川上流部では主稜まで及んでいる。

漁岳山頂周辺は、樹高〇・五m〜一mのハイマツが優占し、山頂南側の草原状の尾根には、ツツジ科の低木や高山性低木類、高山性草本が混生しカーペット状の群落をなしている。

また、オコタンペ湖周辺の湿地は、ヨシ、ススキが全体的に優勢で、ミスゴケ類も広く生育している。湿地内の植物群落は最も水際に生育するトクサ優占群落、ヨシ優占群落、ヨシ優占部分に斑点状に認められるサワキギョウ優占群落・ミズバショウ優占群落、そして湿地周縁部のヤナギ優占群落、シラカンバ優占群落などに区分することができ、水位の変化に対応しているものと見られる。

人の入り込みが少なく、人為的な損傷などがほとんど認められない水際およびシラカンバが生育

する湿地の植生は貴重な存在である。

動物の生育状況をみると、森林帯には、ヒグマ、エゾシカ、キタキツネなどの大型哺乳類のほかエゾクロテン等9科十九種、鳥類では、クマガラ、エゾライチョウ、ヨタカなどと、オコタンペ湖の水禽類等二十科五十二種の生息が確認されている。

また、昆虫類はこれまでの文献等によると、北海道の特産種であるエゾチツチゼミ、ジョウザンシジミ、アイヌキンオサムシなどの生息も報告されている。

#### 審議経過のあらまし

漁岳周辺森林生態系保護地域の設定は、一九九五(平成七)年五月二十三日の第一回委員会にはじまり、同年十月十七日の第三回委員会の審議を経て、設定が終了した。その内容は一九九六年四月に告示されることになっている。

第二回委員会は、七月十四日、国道二三〇号線沿いの望岳台、および豊平川上流の漁入沢流域、さらにオコタンペ湖周辺の三ヶ処において、現地検討がなされる予定であったが、不幸にも濃い霧の中にすべてが閉ざされ、係員のつまびらかな説明と、パネルによって概況をつかまねばならなかった。

この三回の委員会をもって設定作業が終了したのであるが、当初案に対して、最終案は四九〇分の指定面積の増加が了承された。その結果は、表一(表一1)

(表一1)

なお設定にあたって、いくつかの意見が出され

たが、原案が妥当であるという意見のほかに、保護地域を拡大するべきという意見が出された。その主なものは、

(1) オコタンペ湖は神秘的な湖で象徴的存在であり、これらを守っていくためには観光道路下の数箇林班を保存地区(コア)にして、道路より上にある数箇林班と、道路下のまだ施業されていない二つの林班を保全利用地区(バッファ)として広げたらどうか(林班名は省略した)。

(2) 森林生態系の生物の多様性は、水生動物を含めて保護すべきであり、オコタンペ湖全域をコアに、その上の森林をバッファにして広げたらどうか。

(3) 森林に限って見ると広過針広混交林と云う感じがする、本来の針葉樹林は空沼岳南の東側にあり、これらを含めて保護地域を広げたらどうか。

(4) オコタンペ湖周辺は別として、他のバッファ区域は森林限界の下側にハチマキを巻いたような形で線引きされている、もっとバッファ区域を広げたらどうか。

さらにはその他の意見として、

(1) オコタンペ湖の水生生態系について、釣り人の影響等に関するデータがあれば資料として示してほしい。

(2) オコタンペ湖については、どのように位置付けするか地元市、国有林、環境庁の三者が話し合っ

てはどうか。

(3) オコタンペ湖をコアにした場合、展望台から湖に降りないよう看板、鎖等の措置、マスコミ等による啓蒙も必要である。また、既設歩道への誘導看板等を設置する必要性もある。が検討された。

#### (図一4) 残された課題

北海道における森林生態系保護地域の設定にあたって、委員会で次のようにのべられている。

林野庁は、国有林野事業との調和を図りつつ、国有林野内における貴重な自然環境としての天然林等の保護を適切に図り、国民の多様な要請にこたえるため、我が国の主要な森林帯を代表する、又は地域の特色をよく示す原生的な天然林を、特に「森林生態系保護地域」として保護することとし、知床などをはじめ平成元年四月に十二箇所、さらに配置状況を踏まえて平成三年四月に十四箇所を加え、全国で二十六箇所(北海道五箇所、知床、狩場山地須築川源流部、大雪山忠別川源流部、日高山脈中部、漁岳周辺)の森林生態系保護地域候補地を指定した。

この指定を受けた箇所については、平成二年度から計画的に設定作業を進めており、平成六年度末は全国で二十四箇所設定が終了して、北海道では四箇所終了し、残る二箇所について平成七年度末までに設定が終了するよう作業を進めていくこととしている。

したがって、一九九六年春には全国で二十六箇所、北海道では五箇所の設定が終了することになる。すでに設定を終った四箇所の特徴は表一2のようにまとめられている。(表一2)

今回設定されるであろう漁岳周辺の森林生態系保護地域も含めて、道内五箇所の地域を見ると、日高山脈中部、大雪山忠別川源流部など、ハイマツ帯など高山植物の生育する部分が設定面積のかなり大きな割合を占めていることである。それぞれに地帯区分された地域で、代表される

標準的森林が十分に確保されていたかどうか、い  
くばくかの疑問が残る。

国有林が現在おかれている、苦しい台所事情は  
解るが、素直にいつて、それぞれの地域の代表的  
森林施業の中心となる部分が中核となっていな  
ければ片手落ちというものではないだろうか？

また、手つかずの原生的林分にこだわり過ぎた  
感がある。

戦後すぐに、天然記念物に指定されている藻岩  
山に、こともあろうに占領軍の威光を盾にして林  
森を伐り、スキーコースが造られたことがある。

しかしその後返還されると、その痛々しい傷跡も  
急速に回復していった。現在では周辺の林分と見  
分けが難しくなっている。この例でも明らかによ  
うに、過去に施業が行われた林分であっても、無  
謀な皆伐施業がなされていない限り、保護地域に  
含めてもよかったと考えている。

地域設定要領の運用のなかの「択伐が行われた  
記録がある区域であって、伐採が行われた記録の  
ない近傍の区域と同様の森林の状況を呈している  
区域」の適用を大幅に活用してもよかったのでは  
ないか。

不成績造林地が、いつしか天然林扱いに変更さ  
れているくらいだから大胆な発想があってもいい  
のではないだろうか。

また設定区域に隣接している「更新困難地」は、  
これも設定区域に含めてもさしつかえなかったと  
思っている。含めても問題はないはずである。

以上のように、当初計画された道内五箇所の森  
林生態系保護地域の設定はすべて終了することに  
なるが、これで北海道を代表する森林生態系が保  
全されたとはいえない。先にものべたように、手

付かずの原生的森林という概念にこだわりすぎて、  
本来の代表的森林帯が除外されているように思わ  
れるが、無より何歩も前進した森林観は喜ばしい  
ことだ。

しかし、この保護地域の設定による森林収益の  
減少を、他の地域で補うような施策はあってなら  
ない。

森林生態系保護地域は残った、しかし北海道の  
森林は荒廃したであっては困るのだ。単なる杞憂  
であることを希っている。

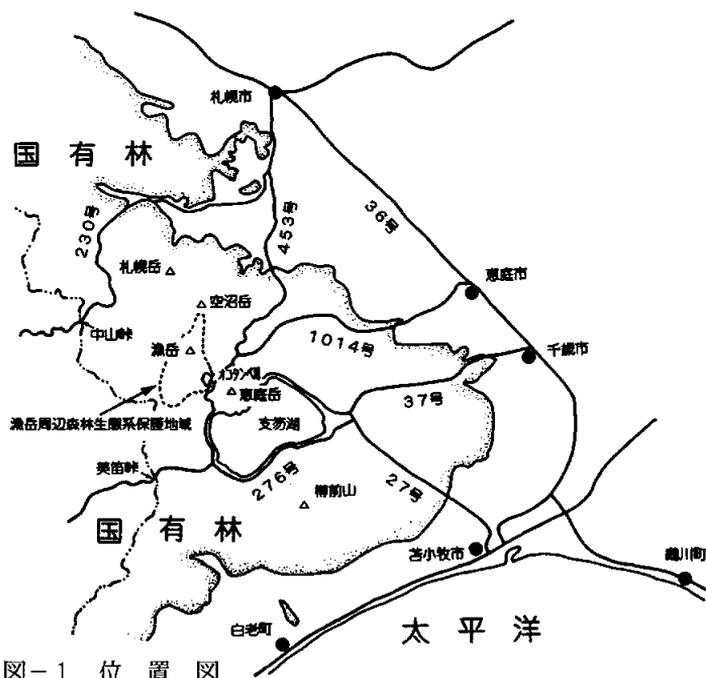


図-1 位置図



図-2 4月の漁岳東斜面。エゾマツ、トドマツ、  
ダケカンバの混交林から、ダケカンバ林へ  
の移行がよく見える。雪で覆われている部  
分はハイマツ、あるいはチシマザサの密生  
地帯

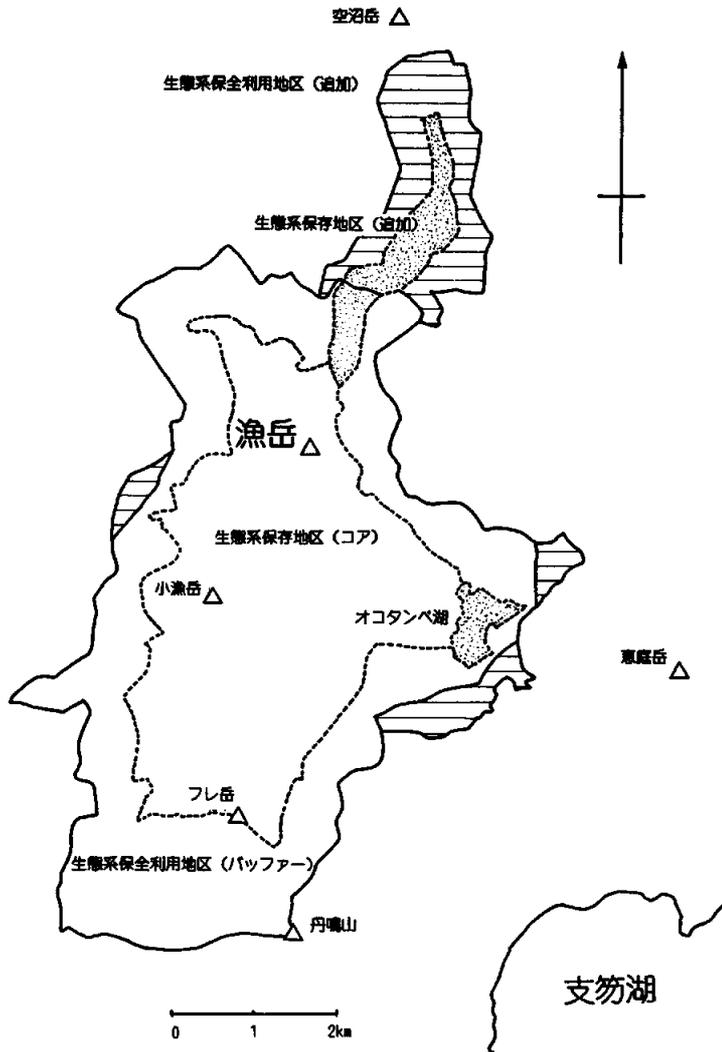


図-3 漁岳周辺森林生態系保護地域 最終案



図-4 6月のオコタンベ湖。中央の山は小漁岳。エゾマツ、トドマツとダケカンバの混交が美しい。

表-1 漁岳周辺森林生態系保護地域の設定案対比表

(単位: ha)

営林署	流域	前回案			今回案			増減 (▲)			
		保地 存区	保全利用 地区	計	保地 存区	保全利用 地区	計	保地 存区	保全利用 地区	計	
札幌	漁入沢										
	空沼沢	252	298	550	254	425	679	2	127	129	
	豊平川本流	375	242	617	375	250	625	-	8	8	
小計		627	540	1,167	629	675	1,304	2	135	137	
恵庭	漁川上流	38	153	191	128	163	291	90	10	100	
	ラルマナイ上流	-	-	-	64	89	153	64	89	153	
小計		38	153	191	192	252	444	154	99	253	
苫小牧	オコタンベ湖	533	262	795	573	251	824	40	▲ 11	29	
	美笛川										
	オコタンベ川	118	506	624	118	577	695	-	71	71	
小計		651	768	1,419	691	828	1,519	40	60	100	
合計		1,316	1,461	2,777	1,512	1,755	3,267	196	294	490	

表-2 これまでに設定された北海道内の森林生態系保護地域の概要

名称	面積 (ha)			森林生態系の特徴		決年月日
	保地 存区	保全利用 地区	合計	植 物	動 物	
日高山脈 中央部	43,958	22,395	66,353	日高側産地は針葉樹林及び針広混交林、十勝側は広葉樹林。中腹以上はダケカンバ帯、ハイマツ帯に至る	ヒグマ、エゾシカ、ナキウサギ等の哺乳類、クマゲラ、エゾライチョウ等の鳥類、特異な高山蝶のカラフトリシジミ等の蝶類等	平成7年 1月31日
大雪山脈 別流部	2,129	8,743	10,872	下部のエゾマツ・トドマツの北方針葉樹林から上部のダケカンバ帯、さらにはハイマツ帯に至る植生	エゾヒグマ、エゾナキウサギ等の哺乳類、クマゲラ等の鳥類、ウスバキチョウ等の蝶類	平成6年 1月31日
知床	25,821	9,660	35,481	冷温帯汎針広混交林、高山植生、海浜断崖植生等	エゾヒグマ、エゾシカ等の哺乳類シマフクロウ、オジロワシ、クマゲラ等の鳥類等	平成2年 4月25日
狩場山地 須葉川 源流部	1,408	1,324	2,732	下部はブナ天然林の集団としての北限、上部はダケカンバ帯、ハイマツ帯に至る	エゾクロテン、エゾヒグマ等の哺乳類、クマゲラ等の鳥類	平成5年 1月29日

1995 (平成7) 年4月1日現在

